■論文題目	動物介在活動が人にもたらす意義に関する一考察 －障がい者グループホームを事例として－		
■氏名(学籍番号)	舘洞佑香(0412020062)		
■指導教員	平井勇介	■所属コース	地域社会・環境コース
■キーワード	アニマルセラピー	保護動物	動物との共生

1. はじめに

現代において、犬や猫とともに生活をする人は多い。歴史的に見ると、人と犬や猫との関係性は激変してきたことが伺える。いわゆる愛玩動物（ペット）として犬や猫がみられるようになったのは、長い歴史からすれば最近のことである。特に、近年はその傾向を強め、時に癒しの対象としながらも犬や猫を伴侶として捉え、単なるペットからコンパニオンアニマル（伴侶動物）とみなされることもでてきている。また、こうした傾向に合わせて、動物とのふれあいの効果（癒しなど）を社会的に活用しようとする動きも生じている（例えば、飯田他、2008）。

本研究では、動物と人間の関係をめぐるこうした傾向が現代社会においてどのような意味合いをもっているのかを考えたい。そうした問題関心のもとで、本研究では、障がい者グループホームにおいて障がいを持つ方と保護動物との関係が持つ意義を、できる限り障がいを持つ方の立場から明らかにすることを目的としている。現代社会においてマイノリティと位置づけられやすい場所から、わたしたちの社会の歪みがどのようにみえるのかを考えたいのである。

2. 調査対象の概要

調査対象地は、花巻市に所在する社会福祉法人光林会が運営するグループホーム「早池峰ホーム」である。早池峰ホームには男女 6 名の利用者さんと、元保護犬の藤花ちゃんが暮らしている。本研究では、聞き取り調査と参与観察調査を用いて、動物が人に与える意義について探っていく。

3.「障がい」とアニマルセラピー

卒論本文ではまず「障がい」とアニマルセラピーの概念整理をしているが、紙面の関係で割愛する。

4. 障がい者の生活経験からみた「藤花ちゃん」の存在

4-1. 障がいを持つ方のこれまで

最近では、障がいについて社会でも理解が得られるようになり受け入れられつつあるが、これまでは障がいを持つ方に対する世間からの目は差別的であったという。職員の方からの聞き取り調査より、一昔前までは障がいを持った方に対する義務教育制度はなく、外出もせずに家にいるしかなかったという。また、障がいを持った方は「知恵遅れ」「精神薄弱者」として扱われ差別されるため、家族は当事者を隠さざるを得ず、当時は自ずと施設に入所するという流れがあったようだ。

当時の障がい者施設について、安積他（2002）は、住みやすい場所ではなく「管理」と「隔離」があったと指摘しており、施設への入所はアイデンティティの剥奪であり、「管理」・「隔離」によって全生活をおおわれている「施設」での生活は、何重にも独特であると述べている。

4-2. 利用者さんについて

これまでに利用者さんに行った聞き取り調査について示していく。利用者さんは話をする中で、「私は藤花ちゃんに助けられたようなもんだよ」と語っていた。本来であれば、人間が居場所を失っていた動物を助けた立場にあたるが、藤花ちゃんがいるから頑張れるし、いなかったら動けないし多分働くこともできなくなると話した。利用者さんにとって、犬が自分を動かす原動力となっているのである。また、犬に助けられていると感じているのは、職員に助けてもらえなかったと思っているからだという。前述の通り、幼い頃から家族以外の人との集団生活を余儀なくされてきたと考えると、自分だけを見てくれる相手や自分だけが頼

れる存在がいなかったために、どこかさみしさを持ち合わせていたのであろう。そこから藤花ちゃんにはさみしい思いをして欲しくない、自分が頼れる存在になってあげたいと思うのかもしれない。

生活リズムについては、世話をはじめとしてやることが増えたため、時間にメリハリがついたという。利用者さんにとって犬が生きる軸になっているようだった。また、自分にできることはないかもしれないと語りながらも、自分のことだけでなく、周りにも気配りや心配を向けていたのは、居場所を求める犬がいるという現状を知り、助けるために自分に何かできることはないか模索しているからであろう。

5. 動物がいることの意義

グループホームでは、藤花ちゃんを皆さんでかわいがっており、吠えれば利用者さん皆が笑顔になり、藤花ちゃんが一瞬でその場の雰囲気を明るくしていた。散歩中には他のグループホームの利用者さんや職員の方、地域の方との交流も見られた。短い時間でも外部の人と交流できる機会は、グループホームの外に出ないと生まれない。一昔前までの生活ではあり得なかったことが、犬を潤滑油として起こっているのだ。これまでは世間から差別的な目を向けられていた障がいを持った方、居場所を失っていた犬、この両者がある種の切実さを伴った関係性を構築していることが理解できよう。

また、障がいを持った方が犬を生活に欠かすことのできない存在と捉えていたという点で、筆者自身と重なるものがある。そこから想像するに、犬という存在が、ある人にとっては生きる力の根源的なところを形づくっているのであろうと考えられる。

6. 結論

調査を通じて最も印象深いことは、保護動物であった藤花ちゃんを「生きがい」と語り、熱心に世話をする利用者さんの姿であった。グループホームの利用者さんは、わたし達には想像がつかない過去を持っている。職員の方に対して、「助けてもらえない」と語る利用者さんの背景をわずかでも知るなかで、その孤独の深さを思い知らされた。だからこそ、藤花ちゃんの世話を熱心に行い、「生きがい」とまで言えるような関係を時間をかけてつくってきたのであろう。現代社会のマイノリティと位置づけられやすい場所における人と動物との関係をみると、動物の存在を自分の存在意義と同等にみなすほどの「かかわり」を求める人の姿があった。

この地点から冒頭の現代社会の傾向を捉えなおしてみると、伴侶動物のあり方に顕著なように、動物との「かかわり」を求める人びとが増加しているという共通点を見出せるように思う。現代社会の人びとが動物に「かかわり」を求める理由が、利用者さんの例で示したような孤独の深さと関わるものなのかはわからない。ただ、筆者自身も、これまでの学校生活をはじめとした集団生活の場において、他者を信じることができなくなり、人と関わることに抵抗を感じた経験がある。社会の中で孤独を感じたり、自分だけが社会から取り残されているという恐怖に襲われ、見えない何かに押しつぶされそうになったことはないだろうか。このように人間関係や社会生活の中で負った傷を、他者とのつながりで回復しようとする人もいれば、本研究で示したように、動物との「かかわり」に意義を持つ人も存在するのであろう。動物との「かかわり」によって現代社会の失望から逃れることができる人がいるとするならば、伴侶動物は今の日本社会を生きる上で必要な存在といえるであろう。

【主な参考文献】

安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也, 2002, 「〈増補改訂版〉生の技法 ー家と施設を出て暮らす障害者の社会学ー」, 藤原書店

飯田俊穂・熊谷一宏・細萱房枝・栗林春奈・松澤淑美「学校不適応傾向の児童・生徒に対するアニマルセラピーの心理的効果についての分析」, 心身医学, 48 巻, 1 号, 2008, 945-954 頁